

# 兵庫県立神戸聾学校 静龍姫塚 伝説

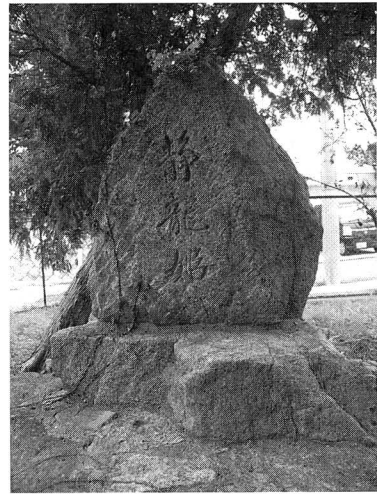
今西昭三郎 著（元神戸聾学校教頭）  
序

現在も聾学校の敷地にあるこの塚について知っていることを述べると、神戸聾学校創設当時は当時の運動場の東端の南北に通る農道のすぐ上に東の方を向いて建っていました。（今の寄宿舍へ降りる階段の横）大きな白っぽい自然石で囲った台座の上に、高さ1メートルほどの砲弾型をしたこれも同じ自然石で記念碑のような形で建っていました。（50周年記念誌P21に移転後の写真が出ています。）

この塚の前面には二段ほどの石段があってその上にセメントで固められていました。当時の運動場は今の小学部の校舎が建っている場所でした。現在の運動場と合わせてこの平地を「地藏平」と呼んでいました。（聾学校の旧町名は西垂水町地藏平）この地藏平から今のバス道までは鬱蒼とした松林でした。運動場にはしばらく松の大木が残っていて、古い卒業生の話では毎日松の木を切り倒し運動場にしようと言っていました。（私が神戸聾学校に来たころは学校の周りにはまだ沢山の松の木がありました。）太平洋戦争が始まってから先生達と子ども達が勤労奉仕で、機械類に使う松根油を採るために、残った松を切り倒したり木の根を掘り上げたりしたそうです。現在の寄宿舍の土地も昭和35年までは野菜畑でした。

昭和38年、現在の校舎敷地（元田圃や畑）にするための田畑買収の話があり、どの辺までを買い取ればいいのか当時の上田校長と私と田圃や畑を見て回りました。今の校地の工事が始まるまでは毎年大きな台風や長雨が続き、その都度福田川が氾濫し現在の校地も共に辺り一面泥水に埋まり田も畑も見えなくなりましたので、川の近くまでは買わない方がいいと校長に言いました。改修前の福田川は堤防の幅が4メートル程、川の流れの幅は1メートル程しかありませんでしたので直ぐ溢れました。

塚については先輩の先生やこの塚にお参り



小学部裏庭にある石碑「静龍姫塚」  
かつて洪水から村人を救った白蛇の化身＝  
静龍姫を祀ると謂う。

にきた地区の人達（東垂水の人が多かった）にその由来を聞いてみましたが断片的な話ばかりで、これと思う話は聞かれませんでした。語り継がれてきたことで文字に残っていなかったからだと思います。聾学校創設当時から勤めておられた加藤先生（故人）のお宅が学校の近くだったので、ご存知かと思ってお聞きしたのですが話しは「大きな木が倒れて水害を防いだということ。村の者が倒れた木を見に行ったら、木の下じきになって白蛇が死んでいた。この蛇が木を倒して水害を防いで村を救ってくれたんだと言って、村の人達がこの碑を建て供養したみたいだ。」程度の短いものでした。ただ、どの話にも共通して出てくるのは大洪水を防いでくれた白蛇の塚だと言うことでした。この由来はもしかして、垂水ジャンクションの近くの転法輪寺か、海神社（わだつみ神社）へ行けばこの碑を建てるとき地鎮祭をしていると思うので、どちらかに残っているかも知れません。

私が聞きたいいくつかの断片的な話を継ぎ足して物語風に綴ると次のような話しになります。話しをつなぎ合わせるために私の勝手な創作が入りますがご了承ください。聾学校の関係者だけでなく垂水の人達の多くの方達がこの話を知ってくだされば、今のような状態に置かれている蛇姫様も浮かばれるのではないのでしょうか。一度盛大にお祭りをしてあげたらどうでしょう。

話は別になりますが、今の寄宿舎を建てるとき階段を作るのに邪魔になるからと場所を移転したんです。ところがその場所へ更に幼稚部小学部の校舎を建てるため再度移転することになり、今の位置に移したんだそうです。当時私は湊川校舎にいましたから聞いた話ですが、この移転作業に中学部高等部の若い先生達数人が関わったんですが、作業をした全員が急に腹痛を起しましたが原因が考えられず、海神社に頼んでお払いをして貰ったら全員直ったそうです。お払いなんて迷信だと言って作業に掛かった若い先生達はショックだったということでした。

### 静龍姫塚 伝説

昔々のことです。地蔵平の丘の上に草屋根の屋根葺きがとても上手な若者の家がありました。彼の腕を見込んであちこちから遠くは明石の方からも、屋根葺きの仕事が入ってきて毎日忙しく働いていました。そのため家に帰ってくるのはいつも暗くなってからで、田圃や畑に挟まれた狭い道を蛙の合唱を聴きながら帰っていました。ある晩のことです。一日の仕事に疲れ果ててぐっすり眠っていたところ、夢の中に一匹の白蛇が出てきました。そして若者に「私は地蔵平に住んでいる白蛇でございます。実は先だって、あなたがこの先の家の屋根の葺き替えをされたとき最後に上げられた藁束の中で休んでいたところ、そのまま屋根に上げられ、くくりつけられてしまい身動きできなくなっています。このままでは死んでしまいます。どうか縄をほどいて助けてください。」と言うのです。若者は朝、目が覚めて変な夢だったなあとは思ったのですが、夢の中の話だからと思い気にもとめず、その日はそのまま仕事に出掛けていきました。ですが仕事に出掛けようとするとき、何か心に引っかかるものがありました。次の日、若者はそれでも思い、いつもより早く家を出て先日葺き替えた屋根に上らせてもらいました。慣れた手つきで言われた藁束をゆるめて開いてみると、そこにぐったりと弱り果てている白蛇がいました。若者は夕べの夢は正夢だったのだと思いました。若者は子どものころから、白蛇

は神のお使いをする蛇だと話されているのをよく聞いていたので、そっと取り上げ屋根をもと通りに直し、地蔵平の松林に行き「悪かったね、ごめんよ、早よう元気になれよ。」と言って松林の中に放してやりました。

若者の屋根葺きの仕事は冬を迎える秋になると、あちらからもこちらからも仕事が入ってきて、引っ張りだこの忙しさでした。そのため、白蛇を助けてやったことなどすっかり忘れてしまっていました。それから何日かたったある日のこと、仕事を終えていつものように暗くなって帰ってきました。そしていつも通る地蔵平の松林のそばを通りかかると、今までに出会ったことのない美しい娘が道端に立っているのに出会いました。若者は「なんて美しい娘だろう！この辺では見たことがないが、それにしても何の人気もないこんな暗いところで会うなんて！どこの娘でどこへ出掛けるんだろう。」と思いながら、声も掛けずに娘の前を通り過ぎ家に帰ってきました。次の日も同じように仕事を終えて暗くなって帰ってくると、昨日と同じところで同じ娘に会いました。それから何日か同じように会おう日が続きました。そのうちに若者は、この娘に会釈をするようになり声も掛けるようになりました。そして、若い者が誰もが感じるように娘に親近感を持つようになりました。その娘は、暗くなった夜でも透けて見えるほど色白で美しい姿をしていました。若者は、こんな娘が自分の嫁になってくれたらいいのだがなあと思うまでになりました。そうするうちに二人は若者の休みの日になると、連れ立ってあちこちに出掛けるようになり、村でも話題にのぼるようになってきました。

やがて秋も深まり日の沈むのが早くなると、若者の屋根葺きの仕事はますます忙しくなってきた、二人の逢い引きもままならない日が続くようになってきました。それでも若者は次に会える日を約束し、それを楽しみに忙しい仕事にもますます力を入れ張り切って仕事をしました。

一緒に出掛けたある日の帰り、いつものように次に会う日を約束して帰りました。その日には若者は、心を決め娘に「自分の嫁になって欲

しい」と言うつもりでした。

その約束の日が来ました。ところがその日はあいにくと、朝から風雨が強く、仕事にも出られないくらいで、天候がよくなるのを家で待っていました。ですが、お昼を過ぎるころからは雨風共に更にひどくなり、外へ出られるものではありません。それどころか垂水を流れるたった一つの福田川が、奥から流れてくる雨水でだんだん水かさが増し、今にも溢れそうになってきました。夕方近くになると、雨も風も多少弱まってきましたが、奥から流れてくる水の量は更に増え、とうとう福田川の水が溢れ出し、田や畑は水浸しになってしまいました。そのうえ、海に向かって流れる水の勢いは更にすごくなってきました。

やがてその日も薄暗くなり、娘と会う約束の時間が近づいてきました。しかし溢れ出た水の勢いは一向に衰えそうにありません。ますます強くなってきて、村の家々が流されてしまうのではないかと思えるほどでした。家から外へ出ることはとてもできません。一方、娘のほうは約束の時間が近づいたので、やがて雨も止むだろうと思い、いつもの出会いの場所である地蔵平の松林で、雨を避けながら若者が来るのを待っていました。しかし、約束の時間になっても若者は来ませんでした。それでも遅くなくても来てくれるだろうと思い、地蔵平の丘から水に浸かっていく村の家々を見下ろしながら待ち続けました。でも若者の来るのがいつもと違ってあまり遅いので、若者の家が見下ろせる丘の端へ行ってみました。娘が行った場所には、地蔵平でもめだって大きい、天にも届きそうなほどの大きな松の木がそびえていました。そこから若者の家を見て驚きました。若者の家にも大水が押し寄せ、家の半分は溢れた水に浸かり今にも流されそうでした。娘は「これは大変だ。この水を何とか堰き止めないと。」と思いました。その時です。黒い雲の間から、ものすごい稲光と雷が鳴り響いたと思ったら、娘が立っていたそばの大木が、地割れと共にゆっくりと村の田圃の方へ倒れていきました。すると、この倒れた松が村に襲いかかっていた大水の勢いを

弱め、流れを迂回させ始めました。水に浸かっていた村の家々も、若者の家も、流されずに助かりました。

次の朝になると、昨日の嵐は嘘のように空は晴れわたり、うって変わったいいお天気になりました。村の人たちは横たわっている松の大木を見に集まってきました。そして口々に「この大木が大きな水害になるところを助けてくれたんだ、ありがたいことだ。」と話していました。その人たちの中にはもちろん、屋根葺きの若者もいました。しかし、若者は倒れた松が地蔵平の丘にそびえていた松であり、娘との待ち合わせ場所に行けず雨の中、長く待たせたのではないかという悔やみ切れない思いで見えていました。そこで急に思いついたのは、もしかしてあの娘が夕べの雷に打たれていなかったらどうかと心配になってきました。そう思うと急いで地蔵平の丘へ上がっていきました。そこには太い松の根が、抜き取られたように辺り一面の土と共に跳ね上がって倒れていました。「これはひどいもんだ、ものすごいなあ」と感じながら、倒れた松の木の根元の方に目をやったときです。木の下の方の泥の中に綺麗な白いものが見えました。四方に広がっている泥の中でも一点の汚れもありません。不思議に思った若者がそばに近づいてみると、それは綺麗な白い蛇でした。よく見るとその白い蛇は、大木の下敷きになって息絶えていました。そっと取り出してよく見ると、この前、屋根から助け放してやった白い蛇でした。そこで若者は夕べの約束のことが急に思い出され、ハッと気付きました。出会う約束がいつもの地蔵平の丘であることや、あの娘がどこか普通の娘と違って見えたことなどを合わせて考え、あの美しい娘は、この白蛇だったに違いないと思いました。屋根の葺束から命を助けてもらった恩返しに、自ら犠牲になって私を助けてくれたに違いないと思いました。それを思うと若者は、これからは娘と会えなくなった失望感と、一方では感謝の気持ちも強く、それが交錯しながら湧き上がってくるのを押さえることができず、そのままその場にうずくまって手を合わせていました。

それから数日後、松の片づけに集まっていた村の人たちにこのことの今までの一部始終を話し、なくなった白蛇を供養しようではないかと話し掛けてみました。村人たちは死んだ白い蛇が言い伝え通り神様に仕えていた白蛇に違いないと話し合い、みんなで丁重に葬り弔ってやることになりました。その後、松の大木が立っていた場所に記念碑を建て、静龍姫（しずりゅうひめ）塚としていつまでもその感謝を忘れずに功績を称えることにしたということです。

2003. 9 改訂

後書き

この話を「垂水の歴史」を出版した故人の川口自動車社長と社長の友人である神戸商大のある教授に話したところ、垂水はこれと言った

伝説のないところだから、その聞いた話に多少脚色してでも物語にして文にして残しておいた方がいいと言われ、右の文のように綴って見ましたが「垂水の歴史」の出版には間に合いませんでした。また、そのとき教授からこういう話しは全国のあちこちにあり、木が東に倒れたんだったらそちらの方の山に雄の蛇塚があるのではないと言われてました。東のその方向の東垂水には地域の人達のお墓はかりで一寸見ただけでは分かりませんでした。今はそのお墓地も新しい住宅が建ち運動場からも見えなくなりましたが、もっとよく探せばあるかも知れません。ですが、もし出てきたら私のこの話は筋書を変えないといけないことになります。

「静龍姫塚 伝説」冊子転載許可済



昭和27年当時の「静龍姫塚」



昭和28年頃の福田川

